
役割関数の構造

コンテキストと役割解釈の可能性

La structure des fonctions de rôle

Les contextes et la possibilité des interprétations de rôle

酒井 智宏

SAKAI Tomohiro

論文抜刷

東京大学大学院総合文化研究科フランス語系学生論文集

Résonances 第3号(2004年度)

2005年3月25日発行

の読みに加えて、夫、首相、秘書が別の人に交代するという値交代の読み(値変化の役割解釈)を持つ²。これは(9a)の主語名詞句が常に特定の個体を指すのに対し、(9b)の主語名詞句は時間に応じて異なる値を取る役割関数でありうることを示している。坂原(1990: 7)は最終的な結論として次のように述べている。

同定文には値変化の役割解釈を持つ名詞句が必要である。ところが名詞句には値変化の役割解釈を持てるものとそうでないものがある。そこで[(10)]のように同定文の解釈が強要される構造では、NPの位置を占める名詞句が値変化の役割解釈を持たなければ非文にならざるを得ない。

- (10) a. NP est un Américain.
b. Un Américain est NP.

1.2 変項名詞句

西山(1992)は変項名詞句と呼ばれる概念を用いて坂原(1989, 1990)を批判している。変項名詞句とは意味表示のレベルで変項を含み、一項述語として機能している名詞句のことである。例えば、(11)の下線部は変項名詞句である。

- (11) a. 花子の一番好きなひとが変わった。 (西山 1988: 116)
b. ひとびとは山田の勤務している大学を知っている。
(西山 1988: 120)

西山(1990)はこの考え方をういて指定文「AはBだ」「BがAだ」を(12)のように定義している³。(13)がその例である。

- (12) Aという一項述語を満足する値をさがし、それをBによって指定(specify)する。 (西山 1990: 137)
(13) a. 花子の一番好きなひとは太郎だ。
b. 山田の勤務している大学は慶応大学だ。 (西山 1988: 134)

例えば(13a)は「Xが花子の一番好きなひとである。そういう変項Xを埋める値を「太郎」の指示対象でもって指定する」という意味である。

ここまでは役割関数によるアプローチと変項名詞句によるアプローチは等価である。(1)、(6b)は変項名詞句によっても記述でき、(13)は役割関数によっても記述できる。変項名詞句によっても例えば(6b)を記述すると、一項述語「mon mari」を満足する値が「un étudiant」によって指定されていることになる。一方役割関数によって(13a)を記述すると、役割関数「花子の一番好きなひと」があるパラメータのもとで値「太郎」を取っていることになる。変項名詞句の概念と役割関数の概念が等価でないことを示す事実として西山(1992: 209)は(14)~(16)を挙げている。

- (14) Son fils est ce garçon.

- (15) 私の長男は、あそこで手を振っているあの男です。
(16) 私の夫は、あそこで手を振っているあの男です。

「[...]」[(14)]を、混雑したパーティーのなかで、『彼(女)の息子さんはどこにいますか』と聞かれたコンテキストでの発話と考えれば、あきらかに「[...]」指定文と読むことができるであろう(西山 1992: 209-210)。同じことが(15)、(16)についても当てはまる。ところが値変化の役割解釈の可能な名詞句と不可能な名詞句を区別する坂原(1989, 1990)の考え方では、役割解釈の可能な名詞句を主語とする(16)は同定文であるが、役割解釈が不可能な名詞句を主語とする(15)はそうではないという直感に反する結論を下さざるを得ない。この事実に基づいて西山(1992: 213)は「『(値変化の)役割解釈』という概念は、コンピュータの分析にとって何ら有効ではない」と結論している。

1.3 問題点

西山(1992)の考え方によれば(15)と(16)の意味を不自然な区別なしに記述することができる。しかし、この説明を過大評価してはならない。なぜなら、変項名詞句という概念は強すぎ、過剰生成を引き起こすからである。例えば、(5b)の「mon fils」が変項名詞句の解釈を持つことができない理由は見当たらない。つまり、役割関数の概念では(14)、(15)が可能であることが説明できず、変項名詞句の概念では(5b)が不可能であることが説明できないということである。以下では役割関数の構造、特にパラメータの構造を詳しく考察することにより、問題の解決を試みる。

2

パラメータ

2.1 パラメータの対立

まず各々の名詞句に対していかなる要素がパラメータとなるかを考えてみよう。パラメータとは名詞句が特定の値を取るための条件を表示するものであるから、値変化をもたらす可能性のある要素のみがパラメータとなる。例えば、次のような関数構造が考えられる。

- (17) a. président (nation, time)
b. mari (woman, time)
c. meilleur ami (person, time)

(17)のパラメータの一つが固定されると、(18)の関数構造になる。

- (18) a. le président de la République (time)
b. mon mari (time)
c. le meilleur ami de Jean-Paul (time)

(18)の各名詞句の時間パラメータが固定されると、もはや値変化をもたらす可能性のある要素は残っておらず、(19)の各名詞句は関数としての性質を持たない。

² 西山(1992)、井元(1995)が指摘するように、メンタル・スペース理論の役割解釈という概念は必ずしも定義が明確でないが、ここでは役割解釈という用語は「役割としての解釈」という意味で用いられている。

³ ここでは「同定文」と「指定文」は術語上の相違であると考えて差し支えない。

- (19) a. le président de la République en 2004 (no parameters)
 b. mon ancien mari (no parameters)
 c. le meilleur ami actuel de Jean-Paul (no parameters)

ここである名詞句に対する役割解釈の可能性を次のように定める。

- (20)ある名詞句が役割(関数)として解釈されるのは、その名詞句が未定パラメータを少なくとも一つ含むときで、かつそのときに限る⁴。

(20)の定義によれば、(21)の可能な解釈は(22a)ではなく、例えば(22b)である。

(21) Le président de la République en 2004, c'est Jacques Chirac.

(22)a. *Le président de la République en 2004,

役割

c'est Jacques Chirac.

値

b. Le président de la République en 2004,

役割

パラメータ

c'est Jacques Chirac.

値

ここで、パラメータの対立という概念を導入する。ある2つのパラメータ設定が同一の役割関数の値変化を引き起こすとき、それら2つのパラメータ(設定)は対立していると言うことにする。ただし、このとき2つのパラメータは同一のレベルのパラメータでなければならない。例えば、ともに時間パラメータである「en 2004」と「il y a dix ans」は対立し得るが、時間パラメータの「actuel」と国パラメータの「des États-Unis」は対立し得ない。例えば、次の結果が得られる⁵。

- (23)a. En 2004, mon meilleur ami est une baleine, mais il y a dix ans, c'était une tortue.
 b. *Le président actuel est Jacques Chirac, mais le président des États-Unis est George Bush.

同定文の定義(2)を保持しようとする限り、同定文の主語名詞句は(20)を満たすものでなければならない⁶。(20)で言われている、名詞句が少なくとも一つの未定パラメータを含む状態というのは、その名詞句に関してパラメータの対立が生じる可能性がある場合にほかならない。時間パラメータが未定であるということは、例えばmaintenantとil y a longtempsが対立する可能性が残されているということである。よって同定文を容認可能にする条件として、(24)が導かれる。

- (24)同定文は、主語名詞句のパラメータの間に少なくとも潜在的な対立があるとき、かつそのときに限り、容認可能である。

ここで注意すべきは、この条件が坂原(1989, 1990)と異なり、同定文の適格性を主語名詞句が固有に持つ性質に帰するものではなく、パラメータという文脈に依存した要素に帰するものであるという点である。(24)の妥当性を示す事実として、坂原(1989: 3)の次の観察が挙げられる。「[(6b)]はこのままではあまり許容度は高くないが、現在への限定を強調する« maintenant »を付け加えたり、時制を過去にし、別の時間との対比を強調すると許容度は上がる[...]ところが、(3b)~(5b)に関してはこのような修正もこれらの文の許容度を変えない」。

(25) Mon mari est un étudiant. (= (6b))

(26)a. Maintenant, mon mari un étudiant.

[sic. Maintenant, mon mari est un étudiant.]

b. À ce moment-là, mon mari était un étudiant.

同定文の適格性を(24)のように規定すればこの事実は簡単に説明できる。(26a)は「かつては別の人が私の夫だった」という会話の含意を持ち、(26b)は「現在は別の人が私の夫である」という会話の含意を持つ。こうした会話の含意により、(26)の各文は(24)を満たす。ここでは時間パラメータの対立が問題になっている。時間副詞のついていない(25)はインフォーマントが(26a)と同じ解釈を復元できる限りにおいて許容される。(25)では現在時制« est »が用いられており、ここからパラメータがmaintenantであることは容易に推測できるが、maintenantが明示的に現れる(26a)の方が解釈にかかるコストが低くなり、(25)より許容度が高くなる。(3b)~(5b)の「il」、「Paul」、「son fils」はそもそも時間パラメータを含まないから、時間パラメータが対立する可能性はなく、(25)、(26a)と同様の解釈のもとでは容認不可能となる。また、女性が夫を変えるという事態を想像しようとするインフォーマントにとっては、(25)も(26)も容認不可能である。なお、よく知られているように、会話の含意は文脈によって却下され得る。(26)の各文を発話する際に、話し手の女性が実際に夫を変えている必要はない。時間によって夫が変わる可能性があればそれでよい。(24)で「少なくとも潜在的な対立があるとき」という言い方をしているのはそのためである。

2.2 パラメータの拡張

西山(1992)はメンタル・スペース理論の批判に際して、(27)の名詞句が、もはや値変化の可能性が残されていないため、役割解釈を持たないと述べている。

(27) 1992年10月現在のフランスの大統領 (西山 1992: 198)

確かに、(22a)が示すように、(27)全体に役割解釈を与えることはで

⁴ パラメータに対応する統語形式にはさまざまなものがある。「フランスの大統領」では風格修飾句であるが、「フランス大統領」では語の一部である。また、パラメータがいつも表現できるとは限らない。日本語の「銀行強盗」という名詞句は、メトニミー的に銀行強盗を行った人を指すことができる。この意味で、人物としての「銀行強盗」は行為としての銀行強盗をパラメータとし、人間を値域とする関数であると言える。ところが、パラメータを明示した「この銀行強盗の銀行強盗は太郎だ。」は不可で、単に「銀行強盗は太郎だ。」とせねばならない。ここではパラメータにはゼロ形が対応している。

⁵ (23b)において次のように括弧内が省略された解釈は除外して考える。

(i) *Le président actuel (de la République) est Jacques Chirac, mais le président (actuel) des États-Unis est George Bush.

(23b)が不可となるのは単に「年代」と「国」とでカテゴリーが異なるからであると思われるかもしれない。しかし、異なるカテゴリー間でも対立は生じ得る。(28)、(29)を参照。

⁶ この論文では便宜上「同定文の主語名詞句」という用語を・A être B・(e.g. « Mon mari est Pierre »)、・B être A・(e.g. « Pierre est mon mari »)におけるAに対して用いる。

きない。これに対し、井元(1995: 100)は次のように述べている。「この観察はしかし、Fauconnierの意図を誤解している[...]例えば、太郎が1992年10月のフランスの大統領はミッテランではなくジスカールデスタンである、と思っているとき、太郎のメンタル・スペースの中では、[(27)]はミッテランではなく、ジスカールデスタンを値として与える」。この指摘に基づいて次のような文を作ることができる。

- (28)a. Taro pense que le président de la République en octobre 2004 est Giscard d'Estaing.
 b. Si Jacques Chirac avait perdu l'élection présidentielle, le président de la République en octobre 2004 serait un autre homme.
 c. Dans ce film, le président de la République en octobre 2004 est Jean.
 d. Dans le tableau de Luc, le président de la République en octobre 2004 est un homme très vieux.
 e. Cet imbécile de Pierre souhaite que le président de la République en octobre 2004 soit Napoléon Bonaparte.
 f. Je veux bien que le président de la République en octobre 2004 soit mon père.
 g. Je croyais que le président de la République en octobre 2004 était un socialiste.
 h. Dans le monde idéal des féministes, le président de la République en octobre 2004 doit être une femme.

(28)は適切な代名詞化を施せばすべて(29)の文脈に適合する。

- (29)En réalité, le président de la République en octobre 2004 est Jacques Chirac, mais _____.

(29)のような対立が作れるということは、これまでの考察で見過ごされてきたパラメータが存在することを示している。(29)の対立は(話し手にとっての)現実と非現実との対立として一般化できる。このレベルの対立を表示するパラメータを α と書くことにする。 α レベルのパラメータの成員は、話者にとっての現実(+R)と非現実(-R)である。非現実には(28)の各文が示すようにさまざまなものがあるが、ある要素が-Rに属するための必要十分条件は、(29)のタイプの対立が潜在的に作れることである。また、-Rに属する要素同士も潜在的に対立する。

上の(24)の条件は α にも適用される。(28)の文が可能なのは、名詞句« le président de la République en octobre 2004 »が(30)の関数構造を持ち、(31)のような対立を作ることができるからである⁷。

- (30)le président de la République en octobre 2004 (α)
 (31) a. le président de la République en octobre 2004 (+R)
 = Jacques Chirac
 b. le président de la République en octobre 2004
 (Taro's belief \in -R) = Giscard d'Estaing

パラメータ α の導入により二つの重要な帰結が導かれる。第一に、他

のパラメータと異なり α は個々の名詞句の記述内容とは無関係にすべての名詞句に備わっている。よっていかなる名詞句でも文脈により役割解釈の条件(24)を満たす可能性があることになり、本来的に役割解釈が不可能な名詞句が存在するという坂原(1989, 1990)の考えは廃棄される。第二に、-Rに属するための必要十分条件は+Rとの対立が可能であることである。また当然、+R自身も潜在的に-Rと対立する。したがって α が関与する同定文(e.g. « Pierre croit que NP est NP », « En réalité, NP est NP »)はすべて(24)を満たし、容認される。

以上の考察から、坂原(1989, 1990)が有標と見なしている(32)の文にも自然な説明が与えられる。

- (32)Dans ce film, mon fils est un étudiant. (坂原 1990: 11)

(32)は(33)のような潜在的対立に支えられて容認される。

- (33)a. Dans ce film, mon fils est un étudiant, mais dans le dernier film, c'était un espion.
 b. Dans ce film, mon fils est un étudiant, mais dans le prochain film, ce sera un escroc.

本来的に役割解釈が不可能な名詞句が存在するという考えが破棄された以上、坂原(1989, 1990)によりある名詞句が(値変化の)役割解釈と両立するかどうかのテストと考えられた(34)の文の位置付けが問題になるが、これは当該名詞句が時間パラメータを含むかどうかのテストであると再解釈することができる。

- (34)NP change (souvent).

事実、時間の推移以外による値変化を表す文が存在する。(35a)は国パラメータによる値変化を、(35b)はパラメータ α (各人の信念)による値変化を表す。

- (35)a. La façon de saluer est différente d'un pays à l'autre.
 b. Ce qui est le plus important dans la vie est différent d'une personne à l'autre.

2.3 発話文脈

本節では発話文脈が α の要素であることを論じる。ある個人のことをよく知っているからと言って、実際の発話文脈でその個人を正しく同定することができるとは限らない。例えば、Fauconnier(1984: 92)の次の文では、電話における同定の失敗が表現されている。

- (36)Ben a pensé qu'Henri était Georges.
 (Contexte : Bien [sic. Ben] a téléphoné à l'appartement de Georges. Il se trouve que c'est Henri qui a répondu, mais Ben a cru à tort que c'était Georges)

また、(37)ではパーティー会場における同定の失敗が表現されている。

⁷ 統語上の埋め込みが無限であることから(« Luc croit que Marie croit que [...] »)、 α も原理上は無限に存在する。したがって(30)は簡略表記である。

(37) J'ai pensé que Pierre était {mon mari/mon fils/Paul} parce qu'il y avait trop de monde à la soirée.

(36)、(37)の同定文の関数構造は字義通りにはそれぞれ(38)、(39)のようになる。

- (38)a. Georges (+R) = Georges
b. Georges (context of utterance \in -R) = Henri
(39)a. mon mari/mon fils/Paul (+R) = Paul
b. mon mari/mon fils/Paul (context of utterance \in -R) = Pierre

しかし、(38)、(39)は奇妙である。話し手は発話の際にも、決して(40)や(41)のように考えていたわけではないからである。

- (40) Henri est Georges.
(41) Pierre est {mon mari/mon fils/Paul}.

話し手が考えていたのは例えば(42)、(43)のようなものであろう。

- (42) Celui-ci (= la personne qui répond) est Georges.
(43) Celui-là est {mon mari/mon fils/Paul}.

(36)、(37)ではFauconnier(1984)の同定原則(Principe d'Identification)が働いている。

- (44) *Identification* : Si deux objets (au sens le plus général), a et b, sont liés par une fonction pragmatique F (b=F(a)), une description de a, da, peut servir à identifier son correspondant b [...].
(Fauconnier 1984 : 16)

このときaは(指示)トリガー(déclencheur)、bは(指示)ターゲット(cible)と呼ばれる。例えば(45)の解釈には同定原則の適用が必要である。

- (45) a. Platon est sur l'étagère de gauche. (Fauconnier 1984 : 16)
b. En japonais, fleur n'est pas un nom masculin ni un nom féminin. (坂原 1982 : 150)

(45a)、(45b)でトリガーはそれぞれ「Platon」、「fleur」であり、ターゲットはそれぞれプラトンの本、日本語の単語「花」である。同様に(36)では「Henri」がトリガーで「celui-ci」によって示される個人がターゲットである⁸。(37)も同じように考えればよい。要するに(36)と(42)、(37)と(43)は同一の対象に対するアクセスの方法が異なるに過ぎない。(36)、(37)の同定文が(24)を満たすならば、(42)、(43)も(24)を満たすと考えるのが自然である。同定原則の適用を考慮すると、(38)、(39)の関数構造は次のように改められる。

- (38) a. Georges (+R) = Georges
b. Georges (context of utterance \in -R) = celui-ci
(39) a. mon mari/mon fils/Paul (+R) = Paul

⁸ 結局両者は個体としては同一である。

⁹ もちろん Paul = celui-làが自明である文脈においては(46)は(47)と同等の情報しかもたらさないが、この等価性は Paul = celui-làという追加情報によるものであり、(48)の定式化自体の変更を迫るものではない。

b. mon mari/mon fils/Paul (context of utterance \in -R) = celui-là

次に、指示代名詞を用いた(46)のような同定文についてももう少し詳しく考えてみよう。

(46) Celui-là est mon mari.

今、(46)の「Celui-là」がPaulを指し、かつ実際に話し手の夫がPaulであるとする。この場合、(46)では役割「mon mari」に値Paulが割り当てられているが、それにもかかわらず、割り当てられている値は(47)とは異なると考えられる。なぜなら、(46)は(47)とは明らかに異なる情報量を持つからである。

(47) Paul est mon mari.

例えば、(47)をすでに知っている人に対してあるパーティー会場で再び(47)を発話しても、聞き手の知識状態に変化はない。ところが、(47)をよく知っている人に対して、混雑したパーティー会場で夫を見つけて(46)を発話した場合、聞き手はそれを十分に内容のある発話として解釈することができる。また、別のパーティーで再び(46)を発話した場合も、やはり新たな情報が伝わる。すなわち、(46)は(47)と異なり、発話状況ごとに常に新しい値を割り当てる。この事実を、発話文脈に指標を付け、対応する値に同一の指標を付けることによって示すと、(48)のようになる。

- (48) a. mon mari (+R) = Paul
b. mon mari (context of utterance₁ \in -R) = celui-là₁
c. mon mari (context of utterance₂ \in -R) = celui-là₂
d. mon mari (context of utterance_n \in -R) = celui-là_n

このように、(46)においては発話文脈が異なれば値も異なる⁹。これは発話文脈と+Rの対立および発話文脈同士の対立が常に顕在的なものであることを示している。したがって、発話文脈をパラメータとする同定文は通常同定文よりも強い形で条件(24)を満たすことになる。(49)のように値の記述に指示代名詞を用いた場合に、一般に非指示的解釈が困難と言われている固有名詞でも容易に役割解釈を許容するようになるのはこのためである。

(49) Celui-là est Paul.

3

結論

以上の考察により、第1節で提示した問題はすべて解決される。

- (50) Maintenant, mon mari est un étudiant. (= (26a))
(51) Mon mari est un étudiant. (= (6b))
(52) *Il est un étudiant. (= (3b))
(53) *Paul est un étudiant. (= (4b))
(54) *Mon fils est un étudiant. (= (5b))
(55) Dans ce film, {il/Paul/mon fils/mon mari} est un étudiant.

- (56) J'ai pensé que Pierre était [mon mari/mon fils/Paul] parce qu'il y avait trop de monde à la soirée. (=37)
 (57) Celui-là est [mon mari/mon fils/Paul]. (=43)
 (58) Son fils est ce garçon. (=14)
 (59) 私の長男は、あそこで手を振っているあの男です。 (=15)
 (60) 私の夫は、あそこで手を振っているあの男です。 (=16)

(50)は「maintenant」と他の時間が潜在的に対立し、許容される。(51)は(50)と同じ解釈のもとでは許容される。すなわち、(51)はインフォーマントが時間パラメータの潜在的対立を読み取ることができる限りにおいて容認される。(52)～(54)の主語名詞句は時間パラメータを含まないので、これらの文は(50)と同様の解釈のもとでは不可となるが、パラメータ α が関係する文脈に埋め込まれた場合には容認される。パラメータ α は時間パラメータと異なり個々の名詞句の記述内容によってではなく、もっぱら文脈によって供給されるものであるから、文脈なしに文が提示された場合にこれを復元するには時間パラメータの場合よりも多くの処理コストがかかる。このため、文脈が与えられない場合には(52)～(54)は(51)よりも容認度が低くなる。(55)では α レベルに属する映画の対立が問題となっており、容認可能である。(56)では+Rと発話文脈が対立しているため、容認される。また指示ターゲットの記述を用いて(56)と同じ事態を表している(57)も自動的に許容される。(58)～(60)も同様に発話文脈と+Rおよび発話文脈同士が対立しており、許容される。(57)～(60)に見られるような発話文脈間のパラメータ対立は常に顕在的なものであり、(24)を強い形で満たす。このため(57)～(60)は主語が通常役割解釈と相容れないものであるにもかかわらず同定文として容認される。

このように、「A être B」という形式の同定文の容認可能性は、単にAとBとの関係を参照するだけでは決定できず、パラメータによって表示される文脈情報を考慮に入れねばならない。

最後に、西山(1992)の変項名詞句の概念の問題点を指摘しておく。まず、変項名詞句の概念では固有名詞を役割とする(49)のような同定文が存在することが説明できない。一般に固有名詞は個体定項であり、述語定項ではあり得ない。これは、変項名詞句が一項述語であると定義されているが、その中に通常述語ではあり得ないものが含まれてしまうことを示している。次に、変項名詞句を一項述語と定義するならば、典型的な変項名詞句と典型的な一項述語は一致すると予測されるが、これは正しくない。名詞述語に限れば、典型的な一項述語にはemployé, infirmièreなどの職業を表す無冠詞名詞が含まれるであろう。ところがこれは典型的な変項名詞句とは言えず、(62)のような同定文は許容されない¹⁰。仮に定冠詞を付加しても、特殊な文脈なしには許容不可能である。

- (61) Nathalie est [employée/infirmière].
 (62) *{Employée/Infirmière} est Nathalie.
 (63) #{L'employée/L'infirmière} est Nathalie.

ここですぐに思いつくのは、変項名詞句が通常の一項述語と同一のふるまいをする必要はなく、典型的な変項名詞句がle président des États-Unisやl'infirmière la plus belle de cet hôpitalであってよいし、さらに固有名詞も変項名詞句になり得るという指定を加えればよい、という反論である。ところがこの反論はさらに深刻な問題を引き起こす。ここで言われているような変項名詞句の典型性条件や固有名詞に関する特別規定がどこから来るかと言えば、まさに(64)や(49)の同定文からにはほかならない。

- (64) L'infirmière la plus belle de cet hôpital est Florence.

この事実は変項名詞句という概念が同定文との関連でしか規定できないことを示唆している。ある名詞句が変項名詞句としての解釈を持つかどうかは結局その名詞句が同定文の主語名詞句になれるかどうかということと等価であり、これを同定文と独立に決定することはできない。すなわち、変項名詞句とは同定文の主語名詞句に付けられた名前に過ぎないということである。したがって、「同定文(指定文)の主語名詞句は変項名詞句である」という主張は「同定文(指定文)の主語名詞句は同定文(指定文)の主語名詞句である」という同語反復に過ぎず、空虚にしか満たされ得ない主張であると言える¹¹。

参考文献

- Fauconnier, Gilles (1984), *Espaces mentaux : Aspects de la construction du sens dans les langues naturelles*, Paris : Minuit.
 井元秀剛(1995)「役割・値概念による名詞句統一的解釈の試み」、『言語文化研究』第21号、大阪大学、97-116ページ。
 西山佑司(1988)「指示的名詞句と非指示的名詞句」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第20号、113-134ページ。
 西山佑司(1990)「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐる」、国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会(編)『文法と意味の間: 国広哲弥教授還暦退官記念論文集』、くろしお出版、133-148ページ。
 西山佑司(1992)「役割関数と変項名詞句」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第24号、193-216ページ。
 Ruwet, Nicolas (1982), *Grammaire des insultes et autres études*, Paris : Seuil.
 Ruwet, Nicolas (1991), *Syntax and Human Experience*, Chicago : The University of Chicago Press.
 坂原茂(1982)「言語の解釈体系としての機能」、『仏文研究』第11号、京都大学フランス語学フランス文学研究室、146-200ページ。
 坂原茂(1989)「コピュラ文と値変化の役割解釈」、『études françaises』、25、大阪外国語大学フランス語学研究室、1-32ページ。
 坂原茂(1990)「記述文・同定文とフランス語のコピュラ文」、『フランス語学研究』第24号、日本フランス語学会、1-13ページ。

¹⁰ ただし、Ruwet(1991: ch. 5)では、非コピュラ文である次のような文に登場する無冠詞名詞句に同定文の主語名詞句と同じ解釈が関与する可能性が示唆されている。

(i) (La) Décision a été prise par le gouvernement de nationaliser les banques.
 (ii) Interdiction/*L'interdiction (absolue) nous a été faite par le directeur de fumer en classe.

¹¹ ここでは同定文の主語名詞句が意味上属詞に対して述語の関係にあることまで否定しているわけではない。問題にしているのは、変項名詞句の概念では与えられたコピュラ文が同定の解釈を持つかどうかを独立に決定することができないということである。本論文の立場では同定文の主語名詞句は役割関数を表すが、役割関数は明らかに一項述語である。しかし、一項述語であることが役割関数の定義ではないので、一項述語でありながら役割関数として機能することができず、同定文の主語になれない名詞句が存在してもよいことになる。これに対して、変項名詞句は一項述語として機能する名詞句と定義されるため、同定文の主語になれない変項名詞句が存在するという事実は別に制約によって説明されなければならない。ここから言えることは、同定文の主語名詞句に関する制約に関する議論に基づいて役割関数の概念よりも変項名詞句の概念の方がすぐれていると結論することはできないということである。

La structure des fonctions de rôle

Les contextes et la possibilité des interprétations de rôle

SAKAI Tomohiro

La présente étude a pour objet de donner une explication générale à des phrases identificationnelles telles que (1-2), que Sakahara (1989, 1990) considère comme plus ou moins marquées.

- (1) Dans ce film, {mon fils/Paul} est un étudiant.
- (2) Celui-là est {mon fils/Paul}.

Les phrases (1) et (2) posent un problème dans la mesure où Sakahara (1989, 1990) soutient que les nominaux comme *mon fils* ou *Paul* ne sont pas compatibles avec les phrases identificationnelles, comme l'indique le contraste illustré en (3).

- (3) a. Maintenant, un étudiant est mon mari.
b. *Maintenant, un étudiant est {mon fils/Paul}.

Cette idée de Sakahara (1989, 1990) est mise en question par Nishiyama (1992), qui observe que les deux types de nominaux en (3) se comportent de la même manière dans certains contextes. Par exemple, il n'y aurait pas lieu de distinguer entre (2) et (4).

- (4) Celui-là est mon mari.

Cependant, l'analyse proposée par Nishiyama (1992) ne peut pas exclure (3b), à la différence de celle de Sakahara (1989). Dans cet article, nous proposons une analyse qui permet d'engendrer les phrases (1-2) tout en excluant les phrases comme (3b). Notre analyse contourne donc les difficultés que rencontrent celles de Sakahara (1989, 1990) et de Nishiyama (1992).

Nous introduisons tout d'abord la notion d'opposition de paramètre pour rendre compte de l'inacceptabilité de phrases comme (5).

- (5) a. *Maintenant mon fils est un étudiant.
b. *Maintenant Paul est un étudiant.

Si deux paramètres donnent lieu à un changement de valeur, nous disons qu'il y a une opposition entre eux. Nous proposons la condition (6) qui préside à l'acceptabilité d'une phrase identificationnelle.

- (6) Une phrase identificationnelle est acceptable si et seulement s'il y a une opposition, au moins potentielle, entre les paramètres de la fonction de rôle qui se trouve dans la phrase.

Les phrases (5) sont peu acceptables parce qu'il n'y a aucune opposition potentielle entre *Maintenant* et un autre temps.

La notion d'opposition de paramètre permet de multiplier les paramètres, suivant la remarque d'Imoto (1995). Il fait remarquer avec raison que la croyance de quelqu'un ou une situation hypothétique peut s'opposer potentiellement à la réalité pour le locuteur. Nous représenterons comme α le paramètre qui représente les oppositions de ce niveau. Le paramètre α est constitué par la réalité pour le locuteur (+R) et les éléments qui s'y opposent potentiellement (-R). L'introduction de ce paramètre, qui se trouve dans tous les nominaux, nous amène à abandonner l'idée, avancée par Sakahara (1989, 1990), qu'il existe des nominaux qui sont toujours incompatibles avec l'interprétation de rôle, ou selon sa terminologie, l'interprétation-changement de valeur. Étant donné que la condition nécessaire et suffisante pour un élément d'être un membre de ce paramètre est qu'il y a une opposition potentielle entre l'élément et la réalité, les phrases qui le contiennent, quel que soit le nominal sujet, satisfont nécessairement à la condition exposée en (6) ci-dessus. La phrase (7) est acceptable parce qu'il y a une opposition entre le film et la réalité, ou entre des films.

- (7) Dans ce film, mon fils est un étudiant.

Les contextes d'énonciation appartiennent au paramètre α . Dans les phrases comme (8), il y a une opposition entre le contexte et la réalité, et entre les contextes.

- (8) J'ai pensé que Pierre était {mon fils/Paul} parce qu'il y avait trop de monde à la soirée.

Ce qu'a dit le locuteur doit être quelque chose comme (9), et non pas (10).

- (9) Celui-là est {mon fils/Paul}.
- (10) Pierre est {mon fils/Paul}.

En (8) *Pierre* est un déclencheur et l'individu dénoté par *Celui-là* est la cible du Principe d'Identification au sens de Fauconnier (1984). La phrase (9), qui n'est différente de celle qui renferme la description du déclencheur, soit (8), que de la façon d'accéder à la cible, satisfait donc à la condition (6).